

火垂るの墓

2008(平成20)年6月2日鑑賞(松竹試写室)



監督＝日向寺太郎／原作＝野坂昭如『アメリカひじき・火垂るの墓』（新潮文庫刊）／出演＝吉武伶朗／畠山彩奈／松坂慶子／松田聖子／江藤潤／高橋克明／山中聡／池脇千鶴／千野弘美／谷内里早／鈴木米香／萩原一樹／矢部裕貴子／原田芳雄／長門裕之（バル企画配給／2008年日本映画／100分）

……8・15には「戦争映画」を観て、「あの戦争」を考えたいが、今年はそれをこの映画で！ 舞台は神戸。14歳の清太と4歳の節子が最後に暮らす横穴式防空壕があるのは、西宮のニテコ池。そこに作った火垂るの墓に象徴される2人の悲劇の原因は食糧難。飽食の時代に生きる私たちは、この映画によって戦争の反対とともに、飽食の反省も！

今年の夏は、この「戦争映画」で

毎年8月15日に向けて「戦争映画」が企画されるのは日本映画界の慣例だが、2008年夏のそれが『火垂るの墓』。野坂昭如原作の『火垂るの墓』の発表は1967年だから、私が大学に入学した年。それから41年の間に、この名作は『火垂るの墓』（88年）として長編アニメ映画とされたし、2005年にはテレビドラマにも。

私は原作も読んだことがないし、アニメ版もテレビドラマも観ていないから、この映画を観てはじめて、ああ、『火垂るの墓』はこんな物語だったのかと納得。もっとも、この評論を書くについて、神戸大空襲はもちろんアニメ版もだいぶ勉強したから、1988年のアニメ版と2008年の実写版はその内容が大きく違うことも確認。他方、納得と同時にある種の違和感も。皆さんにこの「戦争映画」をお勧めしたいのは、そんな私が抱いた違和感をどこまで共有できるかを確認したいから……？

東京大空襲、名古屋大空襲そして大阪大空襲は知っていたが……？

東京大空襲は、『戦争と青春』（91年）や『あしたの元気にな～れ！ ～半分のさつま

いも〜』(05年)で、名古屋大空襲は『明日への遺言』(08年)でよく知っていた。また、大阪大空襲は大阪に住み、大阪の歴史を勉強する中で、あるいは大阪大空襲によって壊滅したアジア最大の兵器工場を舞台とした山本太郎主演の映画『夜を賭けて』(02年)によってよく知っていた。しかし神戸大空襲のことは……? もっとも、都市問題をライフワークとしている私は、兵庫県下で土地区画整理事業がたくさん行われているのを知っていたが、それはいずれも戦災復興事業として土地区画整理事業がやりやすかったため。

この映画では、①主人公である14歳の中学生清太(吉武伶朗)とその妹の4歳の節子(畠山彩奈)が、昭和20年6月5日の(?)神戸大空襲で焼け出された御影(みかげ)のまち、②松田聖子扮する母親が、ひどい火傷を負って死亡する御影の国民学校、③清太と節子が頼っていく未亡人のおばさん(松坂慶子)の家がある西宮、④本城雅夫(江藤潤)が校長をつとめている中学校、⑤清太と節子が隠れ住むことになる横穴式防空壕のあるニテコ池などが登場するが、これらはいずれも馴染みのある場所ばかり……。

なぜ今、日向寺太郎監督が実写版を……?

なぜ1967年の原作が、日向寺太郎監督によって実写版で映画化に……? それは2006年4月に亡くなった黒木和雄監督の遺志を日向寺太郎監督が引き継いだため。

『父と暮せば』(04年)や『紙屋悦子の青春』(06年)などで有名な黒木和雄監督は、一貫してあの戦争(の犯罪性)を問い続けてきた巨匠。そんな監督が進めていた企画を引き継ぐのは荷が重いはずだが、黒木和雄監督が「年少の友人」と呼んだ日向寺太郎監督は、多分それが自分の義務だと自覚してこの映画制作に臨んだのだろう。

時系列に沿った少し単調な作り方には不満があるが、吉武伶朗と畠山彩奈の熱演とそれを支えるベテラン俳優陣らの名演技によって、あの戦争による悲劇が明確に浮かびあがってくることに。

私が違和感を覚えるのは……?

私が違和感を覚えるのは、清太がなぜここまで潔癖さを貫かなければならなかったのか、ということ。これはきっと、彼が海軍大尉の父(高橋克明)の血を引いているため……?

終戦直後の食糧難の時代に闇米を拒否して、配給食糧しか食べなかったため栄養失調で死亡してしまったことで知られるのが東京地裁の山口良忠判事だが、清太の生き方もそれに通じるものがあるからそれに注目！

他方、未亡人のおばさんは、事前に2人の母親から受け取っていた荷物を処分したり、清太が持っていた缶詰を見て態度を変えるなど憎たらしい限り。ちなみに松坂慶子はこういう役をやらせると実に適役で、イキイキと水を得た魚のよう……？ 挙げ句の果ては、「泥棒！」と罵られ、対抗上「出て行け！」ということになるのだが、おばさんにしてみれば、遠縁の子供2人に住むところと食事を与えてやっているのだから、それ相応の見返りを期待したのは当然。相手が子供だと思って（？）その条件設定をきちんと確認しなかったのは不十分だが、そりゃ仕方ないところ。私の目には、このおばさんの生き方の方がむしろ標準だと思えるから、山口判事のような潔癖すぎる生き方を貫いた清太に違和感を覚えたわけだ。

そう思うのは、私の中にあるズルさのせい？ そりゃ、たしかにそうだが、そんなズルさは人間誰でも持っているはず。清太は盗人をくり返ししながらでも、あるいはヤクザの組に入っても、妹と共に生き延びなければならなかったのでは……？

校長先生にも同じ違和感を

大八車を引いて、西宮のおばさんの家に向かっている清太にやさしくしてくれたのが近くの中学校の校長先生で、剣道の稽古をつけてくれたり、自宅に招待してくれたりと至れり尽くせり。校長先生には昭子（谷内里早）と和子（鈴木米香）という2人の娘がいたが、彼女らはピアノを弾いたり、大声で歌を歌ったりと、あの暗い時代の中、精一杯前向きに生きていた。それによって、清太は恋にも似たまぶしい経験をしたわけだが、ある日、中学校内に住みついていた被災者たちが、煮炊きをしたことが原因で火事となり、天皇・皇后の御真影を燃やしてしまったから大変。この責任をとって、校長先生は何と家族4人で一家心中してしまう羽目に……。

私はこれにも違和感がある。なぜなら、たしかに天皇・皇后の御真影を燃やしてしまった罪はあるにしても、「何も一家心中までしなくてもいいのでは……？」というのが私の正直な気持。



© 2008 「火垂るの墓」 パートナーズ

厭世的な学生の描き方は中途半端……？

西宮の未亡人の家の近くには高山道彦（山中聡）という学生が住んでおり、なぜか彼には若い未亡人（池脇千鶴）が連れ添っていた。1度だけ清太が高山の家に招かれて（?）、話を聞かされたところによると、要するに彼は、こんな暗い時代の中、「見ざる・言わざる・聞かざる」の三ザルで、頭にふとんをかぶって世間を避けて生きていくのがベストだと信じている厭世主義者……？

帝国海軍の息子で自分も父のようになることを願っていた清太が、そんな思想にかぶれることはなかったが、病気を理由に軍隊にも入らず、若い未亡人と一緒に暮らすなんてことが、あの時代ホントにできたの……？ 結果的に高山は、あるどさくさに紛れて、町会長（原田芳雄）らに「非国民！」と罵倒されながら虐殺されてしまうのだが、私に言わせれば、この映画で、彼が果たす役割は明確でなく、極めて不十分。時代の落伍者は必ずいるが、他方、日本共産党シンパのような時代の抵抗者も必ずいるはず。さて彼はどちら……？ また、同棲中の未亡人のこの映画における登場価値は……？

「飽食」の反省に絶好！

この映画には食事のシーンが再三登場するが、その食事風景も食べるものも次第に

劣化し、悲惨なものに。その段階は私の観察では4つのレベルだが、遂に食べるものがなくなると……？

第1レベルの幸せな食事風景は、今や清太の記憶の中にしか存在しなくなった海軍大尉の父とやさしい母、そして幼い妹と4人で食べているもの。笑い声に包まれているうえ、その食するものも当時としては結構豪華……？

第2レベルの未亡人宅における食事風景も、当初は未亡人の息子（萩原一樹）や娘（矢部裕貴子）らと一緒にのもので、貧しいとはいえ、戦時下ではそれなりに満足できるもの。親から預かった着物を売ったり、清太が持っていた缶詰をネコババしながらでも、これくらいちゃんと食事の世話をしているのだから、やり方によってはここまで清太と未亡人が対立しなくてもよかったのでは、と思わざるえない。

第3レベルは、清太と未亡人との「第1次対決」によって「これからあんたらの面倒は一切みない！」と宣言されたことによって、炊事を別々にするようになった風景。清太は庭で火をおこし、米を炊くのだが……？ また、お兄ちゃんの作ったごはんに満足できない節子が未亡人たちの食卓を見に来ると、未亡人の娘は「私たちがでかけた後で食べてね」とやさしく言うのに対し、未亡人は「座ってもいいけど、何も出ないよ」とあくまで意地悪。

そして第4レベルは、清太と未亡人との「第2次対決」によって、清太と節子が横穴式防空壕での生活を開始してからの食事風景。誰にもジャマされない2人だけの生活は、当初楽しいものだったが、売る着物がなくなってくるとヤバイ。そして悲しいのは14歳の清太にそんな状況を切り抜ける「突破力」が乏しいこと。もちろん、やむにやまれず芋を食べていた子供からそれを横取りしたり、空襲時に避難した家の中に忍び込んで食べ物を盗んだり、清太は清太なりに「努力」を続けていたが、私に言わせれば所詮その程度ではまじめすぎ……？

そんな中で迎えたのが1945年8月15日。つまり日本敗戦の日だが、その頃すでに節子の体は衰弱してしまい、清太もかなりフラフラ状態。これでは2人で作った蛍の墓に2人が入るのも時間の問題だが、それもこれも食糧難のせい。こんな映画を観て、飽食の時代を生きる私たちは、この「飽食」を反省しなければならないのでは……？

2008(平成20)年6月5日記